

## ちから 力くらべ

むかし おとこ  
昔の男の子は、相撲を取った  
り、ばん持ち石を持ち上げたり  
して、力くらべをしました。



かすがじんでい  
春日神社の境内には、その

ばん持ち石に使われた赤目石が今も残っています。

鳥井町では、村の若い衆（青年）が集まって

「どんだけ（どのくらい）持ち上げられるか競争

しようぞ。

と、力くらべをしました。そして、赤目石の下を

あり いっせいであ  
蟻が一匹通るほどに、わずかでも持ち上げること

ができれば、

「おめえ、もう一人前やぞ。」

い  
と言ってほめられました。

このようならばもち石は、豊地区内の神社の境

内にそれぞれあり、力くらべをすることにより、

力のある人が村人から尊敬されました。

また、昔の子供は、小さい時から家の仕事の手  
伝いをよくしたので、足腰が強く、大変力があり  
ました。なかでも、鯖江山三代目になった下氏家  
の手鹿平作さんは相撲取りとして有名で、次のよ  
うなエピソードが残っています。

・三才の時、宇須尾（宮崎村）から米を一升、背  
中に担いで歩いて帰った。

・十二、三才の時、瓦を普通の大人よりも二、三  
枚多く小曽原（宮崎村）から細い山道を、天秤  
棒で担いで運んだ。

・若い衆の時、友達三、四人で夜中に家を出て、  
浜（越前町）まで歩いて行き、夜明けの四時頃  
に、浜で水揚げされたばかりの魚を、五、六十  
キ口、天秤棒で担いで武生の魚市場まで運んだ。  
・若い衆の時、力くらべの真ん丸いばんもち石を  
持ち上げる技は、普通の人よりずば抜けていた。